ジングシュピール「劇場支配人」は、1786年2月3日にモーツァルト（1756-1791）によって、作曲された。当時、彼は「フィガロの結婚」の作曲にあたっており、皇帝ヨーゼフ二世のたっての依頼でシェーンブルン宮で催される祝祭のためにこれを書き上げた。劇は、同月7日に同宮の演劇場付きの大温室で、「まずは音楽、おつぎが言葉」（カスティ作詞、サリエリ作曲）と共に上演された。これは、ドイツとイタリアの音楽劇を聴き比べる趣向のためであったと言われている。序曲は、全体から見ると大規模なものであり、構成も厳格なソナタ形式を採用している。このため後に、序曲のみの上演が頻繁に行なわれるようになる。なほ、フルートは、序曲にだけ編成されている。

この「小組曲」は、もともとドビュッシー（1862－1918）が四手のためのピアノ連弾曲として1888年から1889年にかけて作曲したものを、H．ビュッセルが管弦楽に編成しなおしたものである。他人の手を経ているが、オーケストラのための楽曲が少ないドビュッシーとしては、数すくない貴重なレパートリーである。また元来のピアノ曲としても、同様に数少ない作品となっている。それは、何といっても彼が歌曲作曲家であったことを意味している。ドビュッシーの作風は、一般に印象派とか象徴主義とか言われている。これは今までの、合理主義と個人主義の表れである調性や古典派以来の様々な形式を排して、新しい彼なりの語法を創出したことにある。そしてこの語法が、彼の創造世界のなかで出来上がる時期が、「小組曲」の作曲年代と一致している。1889年は、再度バイロイトに赴き彼は反ヴァーグナー的傾向を示し始める時であり、パリでは万国博覧会が催され極東の音楽に触れる機会を持った時でもある。曲全体は、四つの楽章から構成されており、ビュッセルは多様な手法を用いて編曲していて、各楽器の奏法にも工夫があり原曲を凌ぐものがある。

シューマン（1810－1856）は、「交響曲第二番ハ長調」を1845年12月から翌1846年10月にかけて作曲している。初演は、1846年11月5日にライプチヒのゲバントハウス演奏会において、メンデルスゾーンの指揮により行なわれた。演奏頻度は高くないが、交響曲はベートーヴェンの伝統を踏まえたもので、最重要の作品に属している。折しも1843年はじめ頃から起こったシューマンの精神衰弱は、翌1844年になっても快方に向かわずに、静養の為止むなく彼はライプッィヒからドレスデンに転居した。この後次第に回復し、1850年までのいわゆるシューマンの巨匠期には「ピアノ協奏曲イ短調、作品54」とともに、この交響曲が代表的な作品となっている。病魔を克服しつつあるためか、この交響曲はベートーヴェン的大団円の構図「苦悩を通じて歓喜に至れ」の、シューマン風な在り方を表現している。

第一楽章の導入部は、ホルン、トランペットとトロンボーンによる全体を支配するモチーフが奏されて始まる。第四楽章の冒頭には、主題を想起させる上昇音型の序奏が置かれて、つづいて行進曲風の主題が奏される。これは暗い悲劇的なものを暗示する初めから、徐々に最後の華々しい讃歌の響きを導く道程であり、つまりベートーヴェン的大団円なのである。第三楽章の気高いまでの美しさは、精神の自由を謳歌しつつ歌曲作曲家としてのかれの面目を施していて、全作品を通じて特筆されるべきである。がしかし、この美しさは精神の自由を示しながら、その一方では狂気への兆しを黙示していたのである。

（藤井部　勉）